口腔機能発達不全症

【口腔機能】NAVI

vol 15

口腔機能発達不全症・口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します

乳幼児・学齢期には適切な獲得、高齢期には維持・向上のため口腔機能に対する生涯を通じた歯科医療による介入が必要です

▶舌圧検査を用いた客観的指標で小児口腔機能管理

口腔機能を知るうえで、舌を評価することは大事

小児歯科診療の際に、舌の動きが鈍くポタンとして筋力のない患児が見られます。そのようなお子さんは、食べ物を口に入れたまま飲み込むのに時間がかかったり、口呼吸、いびき、発音不明瞭など、口腔機能に問題が生じることがあります。当院では口腔機能発達不全の診療に以前から舌圧検査を取り入れてきました。舌圧を数値で可視化することで、現状や訓練の成果を患児、保護者と共に確認することができ、モチベーションにもなります。令和6年の診療報酬改定で舌圧検査の小児への適応拡大があり、年齢ごとのカットオフ値が示されたことで、より細かな評価、指導、管理が可能となりました。

院内システム

【対象患者】
口腔機能の問診票にチェックがあり、所見（右図）がある場合に検査を提案。

【検査・説明】
口腔機能発達不全症の検査を実施（30分の予約）。

【管理】
毎月実施（30分の予約）。
舌を動かすシンプルなトレーニングが基本。
ガムトレーニングなどを実施。

Point! 自覚症状はあまりないことが多いため問診にて問題を抽出

問診票の項目

- ☑ 食べるのが遅い、または早い
- □ 丸呑みしている
- ☑ くちゃくちゃ食べる
- ☑ 発音が不明瞭（5歳以降）
- ☑ 睡眠時のいびき
- □ 3歳以降も指吸いなどの口腔習癖が続いた

口腔機能発達不全を疑う所見

- □ 口唇閉鎖不全（お口ぽかん）
- ☑ 舌の動きが鈍い、筋力がなくポタンとしている
- ☑ 歯列不正
- ☑ 舌小帯の付着異常
- □ 舌突出

Point! 1セット5回を5セット。簡単にできるようになれば強度を1つ上げる

図1　訓練道具（ペコぱんだ〈JMS〉）
舌圧がかなり弱い子は「ペコぱんだ」をお薦めして希望者には購入してもらう。

図2　同じ動作を指示した際の舌の違い（細く尖らせて前に出し、左右に動かす運動）

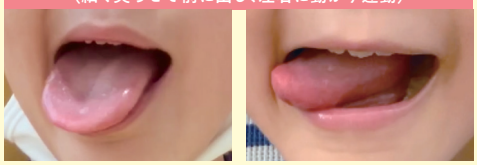

図2-1　訓練開始前
力のなさそうなポタンとした舌。動きも鈍く、舌を尖らせることができない。

図2-2　訓練開始1年後
しっかり力を入れて細く尖らせることができ、左右に動かす運動もスムーズ。

坂井歯科医院
（愛知県名古屋市）
日本小児歯科学会専門医
副院長　林 志穂 先生

当院のコンセプトは、患者さんの人生に寄り添い、生涯を通して健康をサポートすることです。これまで小児矯正治療の患児にMFTを自費で行っていましたが、2018年に口腔機能発達不全症が保険導入されたことを受けて、より多くの患者さんを診るために、診療システムを構築してきました。歯並びに問題が現れていなくても、口腔機能に問題を抱えている子が多くいます。このような疾患に対応することは、子供達の健やかな成長において非常に有益です。う蝕処置・予防そして口腔機能を生涯を通して診ることが歯科医院の大きな役割になると考えています。

症例

患者　6歳8か月　男児
主訴　検診希望にて来院

口腔機能の問診にチェックがあり、
口腔内所見では舌に力がなく、特に舌の左側が上に持ち上がらない。
口腔機能発達不全を疑い検査とチェックリストで診断。
該当チェックリスト項目がC1～6を3項目含む8項目。

- **過蓋咬合（C-2）**
- **咀嚼時間が長すぎる（給食も完食できない）（C-5）**
- **偏咀嚼（右側）（C-6）**
- **食べる量は少なくムラがある（C-8）**
- **発音不明瞭（C-9）**
- **下口唇を挟む（C-11）**
- **舌小帯強直あり（C-12）**
- **痩せ（C-13）**

6歳8か月　舌圧 10.2kPa
上に全く上げられない。ポッピングもできず自分の手で上げようとしているところ。

機能訓練
舌圧子を用いた訓練やポッピングから開始。ガムトレーニングとペコぱんだの訓練を追加。

7歳8か月　舌圧 33.8kPa
しっかりと吸い上げができている。キープしてからのポッピングも可能に。

1年間の訓練の結果、保護者より「**食事のスピードは速くなり、量も増えた。給食も完食でき、肉の塊なども食べられようになった。発音も明瞭になり、音読もスラスラと読むことができるようになった。**」とあり、舌圧の数値も平均を超え口腔機能が改善。

Point! 舌圧が向上するにつれ、舌の機能（食べること、話すこと）に改善が見られた

歯科衛生士が口腔機能発達不全を発見する一番多い場面が検診時だと思います。舌や頬粘膜に力がなく、バキュームにすぐ吸い付いたり、溜まった唾液を飲み込めず、お口を長く開けていられないことも特徴の1つと考えています。舌圧測定を行い数値を伝えることで、患児や保護者にも分かりやすく経過を伝えることができるため、モチベーションアップになります。また、普段の診療からたくさん会話することを心がけています。その中で得た情報や感じた違和感を見逃さずに、これからも子供達の健全な口腔育成のために努力していきたいと思います。

（日本小児歯科学会認定歯科衛生士　梶岡 幸枝さん）

※2024年6月現在の情報です。